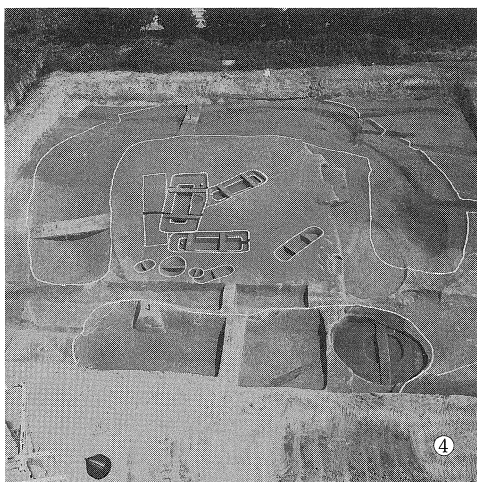
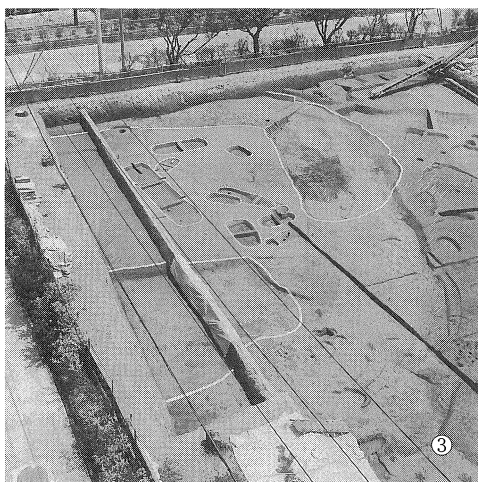
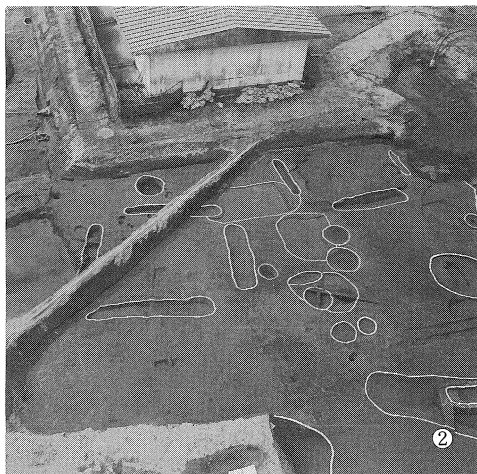


埋蔵文化財 愛知

No.23



山中遺跡の調査

山中遺跡は、弥生時代後期の標式遺跡として著名である。今回の調査では、弥生時代前期の
竪穴住居、方形周溝墓、大溝などが検出され、県下で初めて稲作農耕定着期のムラの一端が明
らかとなった。また、弥生時代後期から古墳時代初頭の墳丘墓や水田等も確認された。

①大溝と竪穴住居（弥生前期）

②方形周溝墓（弥生前期）

③主体部の残る墳丘墓（弥生後期）

④前方後方型墳丘墓（古墳前期）

（6 ページに関連記事掲載）

シリーズ「縄文遺跡を語る」

東光寺遺跡の縄文土器

東光寺遺跡

東光寺遺跡は、額田郡幸田町大字深溝に所在し、東の遠峰山の山塊と西の三ヶ根山の山塊に挟まれた岡崎と蒲郡を結ぶ狭い谷の河岸段丘上にある。ここは蒲郡に接する位置にあり、遺跡からは数キロ先に三河湾が望める。今般この谷を横断して県道が建設されることになり、これに先だつ幸田町教育委員会の試掘調査によってこの遺跡は発見された。そして、その後の愛知県埋蔵文化財センターの調査によって縄文時代弥生時代、奈良時代、中世などの時期の遺構・遺物が検出された。

東光寺遺跡の縄文土器

縄文時代は、紀元前約1万年から同約3千年までの長い期間に渡る。現在この時代を（草創期）、早期、前期、中期、後期、晩期の5ないし6時期に分けるのが一般的である。東光寺遺跡からはこの中の中期以降、すなわち紀元前2千年を前後する時期から後の時期の縄文土器及び、これに伴う石器、石製品、土製品などが検出されている。しかし、当時の遺構から出土しているのは晩期の遺物に限られており、特に自然地形の凹地とも考えられる溝状の遺構（第1・2図 S D02）から出土したものが大部分を占める。

この溝状遺構から出土した土器はほとんど一



第1図 縄文時代溝状遺構

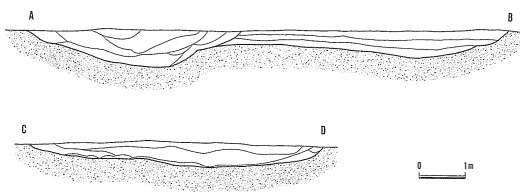
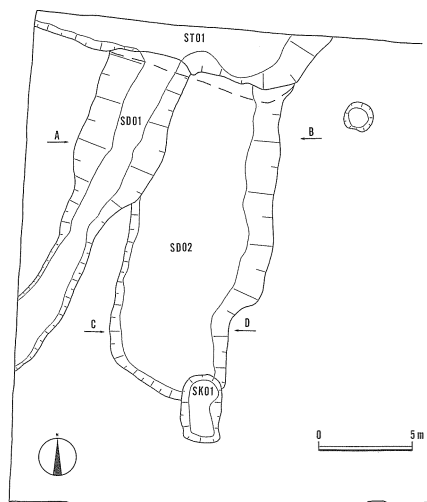
時期に属し、東三河において稲荷山式土器と呼ばれているものである。この土器は、三十年ほど前に宝飯郡小坂井町の稲荷山貝塚の調査によって設定された土器型式であり、縄文時代晩期を古い時期から新しい時期まで前葉、中葉、後葉の三時期に分けた場合に中葉にあたり、更に言えばその中でも古い時期に含まれる。これは、以下の5種類の要素によって構成されている。

第1類 文様がなく、丁寧な整形もなされない単純な形をした深鉢形土器（粗製土器）

第2類 丁寧に磨いた文様のない浅鉢、壺などの各種の土器（精製土器）

第3類 丁寧に磨かれた特殊な器形の浅鉢で、西日本地域に関連性のあるもの（精製土器）

第4類 縄文などの文様をもつ丁寧に作られた浅鉢などの土器で、東日本地域に関連性のあるもの（精製土器）



第2図 溝状遺構遺構図

第5類 東海地方西部に特有の文様をもつ浅鉢などの土器（精製土器）

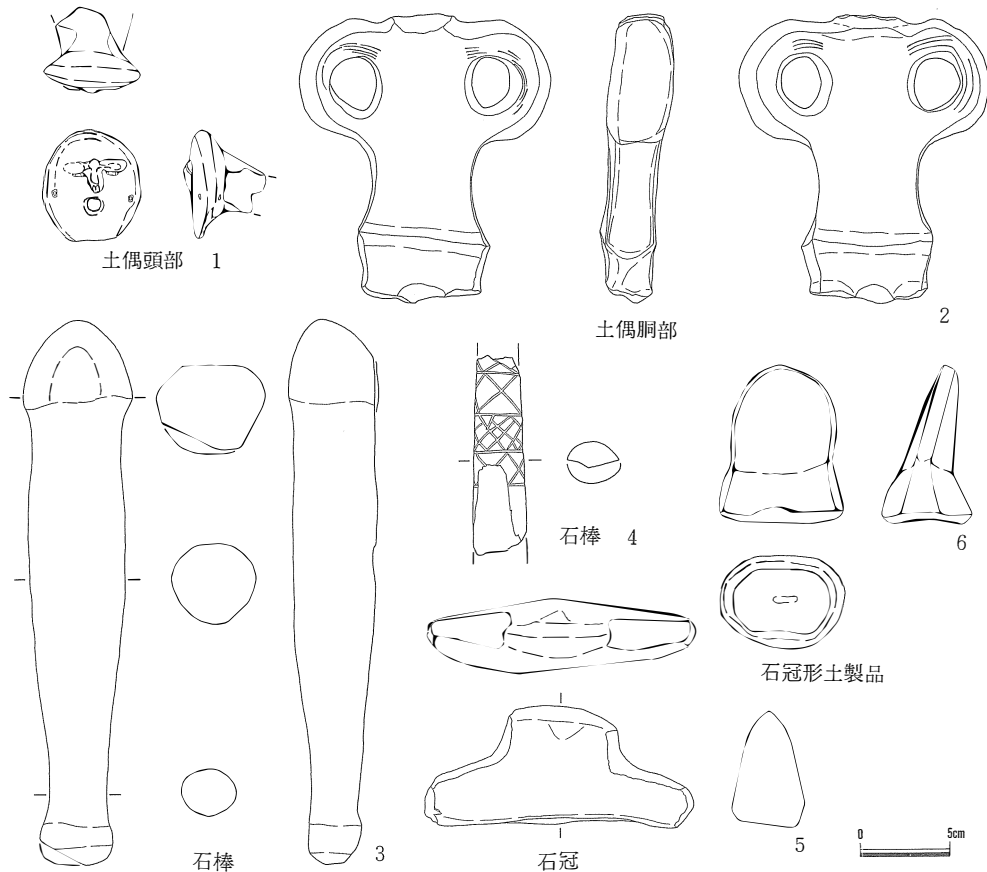
この構成で特徴的なことは、第一にこれらの土器で圧倒的に多いのは煮沸具と考えられる第1類で、全体の90%ほどを占め、残りを他の4種類の土器が占めることである。東光寺遺跡では、整理用の箱で100箱ほどが出土したが、一箱中に何十点か土器片があるうち文様のある土器あるいは丁寧に整形された土器は数点のみという状況である。第二に、少量であるが東西日本の土器が同時に存在し、両者の中間にあるこの地域の位置的な環境をよく示していることである。しかし、ふたつの要素が混在しているものの総体として見た場合、文様をもつ土器の絶対的な少なさから西日本的な様相が強いといえる。

縄文時代の特特殊遺物

東光寺遺跡の晩期の遺構からは、土器、石器といったもの以外に非日常的な呪術的あるいは祭祀的なことに関わる遺物が出土している。土偶（第3図1・2）は、元の形がそのまま残ることはまず無く、必ず破損しているか、破損している部分が出土する。破損することに意味があるような呪術的な道具であり、頭部と頭部・両脚を失った胴部が出土している。石棒（同3・4）は、男性器を象徴しており、祭祀的な道具と考えられる。石冠（同5）は「えぼし」の形をした石製品で、後・晩期に中部地方に分布するもので、用途は不明である。第3図6は、石冠を土製品に写し換えたものである。

参考文献 杉原莊介他 「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡」（考古学集刊2-3）

（酒井俊彦）



第3図 縄文時代の特特殊遺物

市町村だより

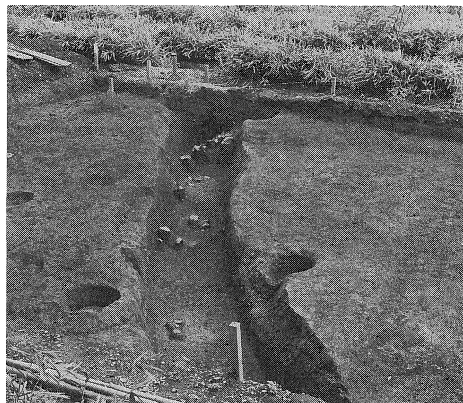
白石遺跡

豊橋市

白石遺跡は豊橋市石巻本町字櫃割に所在する。今回の発掘は豊川用水の揚水ポンプ設置に伴う事前の発掘調査であり、平成2年9月から10月にかけて行われた。調査面積は約60㎡と狭いが、遺構検出面で幅約1.3m、深さ約0.7m、長さが約10m（発掘区内の長さでさらに伸びることは確実）の環濠と考えられる断面U字形の溝が確認された。溝には環濠の内側から投棄したと考えられる状態で焼骨の小片と炭と共に壺、甕各5点ほどの土器が出土した。

溝内から出土した土器は遠賀川式のもので、櫛王式や水神平式などのいわゆる条痕文土器はほとんど含まれていない。

溝は沖積地を見おろす比高差10m程の台地先端部を限るように台地中央部に向かって弧状に伸びており、三重県の永井遺跡、大谷遺跡、愛知県の高蔵遺跡で確認されたものと形状、規模



とも酷似している。これまで条痕文土器の遺跡では環濠を推定できるような遺構は発見されておらず、遺構のあり方からも遠賀川式の単純遺跡である可能性が高い。

これまで、遠賀川式の主体的集落は尾張平野までとされてきたが、突帯文土器の分布圏と重なるように、既に弥生前期に三河まで来ていたと考えられる。
(賛 元洋)

枯木宮貝塚

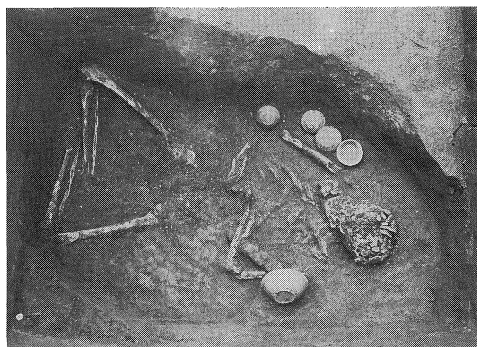
西尾市

西尾市南部の碧海台地最南端に位置する県指定史跡枯木宮貝塚は、貝層が存在する地域において過去数次の発掘調査が実施されている。これにより23体の人骨が検出されたほか、「寺津式」の縄文土器、骨角器、石器が出土し、縄文晩期前葉の標式遺跡となっている。

今年7月に実施した発掘調査では、縄文晩期の遺構、遺物とともに方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居、中世埋葬土坑を検出した。

竪穴住居は6.4×6.4mの方形住居で、北側にカマド、南側に貯蔵穴を持ち、床面にやや小型の5.6×4.6mの立て替え前の住居が認められる。住居の出土遺物は6世紀の杯身、杯蓋、長頸壺、広口甕、台付甕とともに製塩土器、土製紡錘車が共伴する。この事例は市内で2例目で、古墳時代の生活用具を考える上で重要である。

中世埋葬土坑は隅丸長方形で、仰臥位の人骨が埋葬され、北側頭部に13世紀後半の山茶碗、



山皿、右脇に短い直刀を副葬する。方形周溝墓は、北端を検出し、台状部1辺9.4m、周溝幅1.2mを測る。周溝埋土中からは縄文晩期の遺物と貝が出土したのみであり、時期を確定することは困難であった。

今回の調査では縄文晩期の埋葬土坑を検出したが、貝塚の西側には良好な古墳時代、中世の集落・墓域が広がり、枯木宮貝塚に新しい性格が加えられた。
(松井直樹)

東古渡町遺跡

名古屋市

東古渡町遺跡は、名古屋市中区金山町および熱田区金山町にあり、金山総合駅の南側一帯に広がる弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。遺跡は、南に向かって細長く張り出す熱田台地の東端に立地している。標高はおおよそ10 mである。

昭和44年に名古屋考古学会によって発掘調査が行なわれている。その後、金山駅の再開発計画にともなって、昭和62年5月から6月にかけてと平成元年12月から同2年2月にかけて、そして同年4月から10月にかけての3次にわたって、おおよそ4500㎡を見晴台考古資料館が発掘調査を実施した。

これらの調査で、弥生時代後期の竪穴住居跡と溝、古墳時代の溝、古代・中世の竪穴住居跡など多くの遺構を検出している。遺跡の範囲は、見晴台考古資料館の発掘区の東側と南側に広がると推定される。また、JR線・名鉄線の掘削をはさんで北側にも広がる可能性がある。

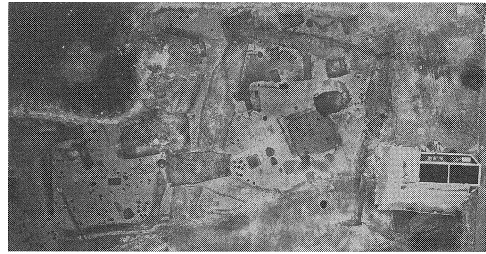
遺跡の中心となるのは古墳時代の溝である。

甚目寺遺跡

甚目寺町

本遺跡は、海部郡甚目寺町大字甚目寺字東門前に所在する。今回の調査は甚目寺本堂の建て替えに伴う事前調査として、約500㎡を対象に実施した。

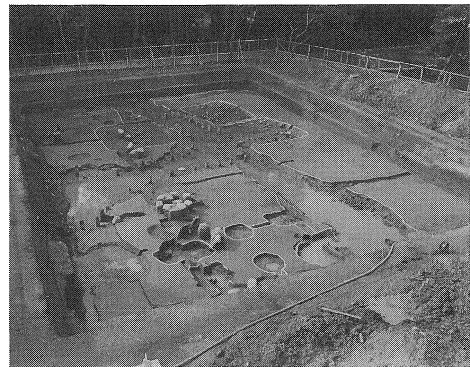
今回の調査の結果、古代：掘立柱建物跡1棟、竪穴住居4軒、中世：溝1条、近世：版築による基壇を有する礎石建物跡1棟を検出した。遺物では、弥生土器、須恵器・土師器などの他、瓦類、灰釉陶器、緑釉陶器、「寺」「南」「増」などの墨書銘のある山茶碗などが出土し、本遺跡が、弥生時代～近世にかけての複合遺跡であることを確認した。又、調査区北側～東側にかけて、常滑産「三筋壺」・「鳶口壺」、瀬戸産「四耳壺」・「水注」などが出土しており、中世では調査区周辺が墓域であったことが判明した。



これらの溝は方形に巡り、供献用の須恵器をはじめ、土師器や埴輪を出土している。小規模な墳丘をもつ墓の周溝と考えられる。これまでの調査で11基を確認しているが、埋葬施設はみつからない。

これらの墳丘墓には、城山2号窯の時期の須恵器を出土するものと、東山11号窯の時期のものを出土するものがある。さらに、東山11号窯の時期のものは2つの時期に分けることができるようである。また、古い時期の遺物には埴輪が含まれている。詳細な検討はまだ行っていないが、5世紀後半から6世紀初頭にかけての良好な資料である。

また、奈良・平安時代の竪穴住居跡を6軒検出した。遺跡の西側200 mには尾張元興寺跡があり、それとの関係が注目される。(川合剛)



今回の調査は、現寺域内で初めての本格的な発掘調査であり、寺伝による推古天皇5年(597)創建説を裏付ける資料を期待したが、甚目寺創建期の遺構を検出できず、その様相を明らかにすることはできなかった。しかし、今回出土の瓦類のうち、白鳳期に遡るとされる単弁連華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦や鴟尾などがみられ、甚目寺創建推古5年説に迫る資料を得ることができたと思われる。(内山伸也)

遺跡紹介

山中遺跡

一宮市

一宮市の西方に位置する萩原町の周辺は、木曾川により形成された自然堤防がよく発達し、北から山中遺跡・南木戸遺跡・苗代遺跡・ニタ子遺跡・河田遺跡と弥生時代から古墳時代にかけての注目すべき遺跡が濃密に分布する。なかでも、山中遺跡は、弥生時代後期の標式遺跡として著名であったが、今回、遺跡内に所在する県立尾張病院が改築されることになり、その事前調査として、(財)愛知県埋蔵文化財センターが、3,500㎡にわたり発掘調査を実施することになった。

調査により確認された遺構・遺物は、弥生時代前期と弥生時代後期～古墳時代初頭の二時期に大別することができ、以下、その概略を紹介していきたい。

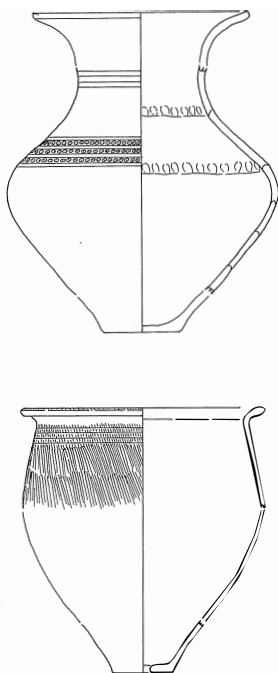
弥生時代前期の遺構は、竪穴住居10棟・方形周溝墓7基・環濠の可能性が考えられる大溝2条・石器製作関連遺構がある。遺構は90A区の

ほぼ全域で検出しており、調査区を南東から北西に横断するSD62(環濠?)によって、竪穴住居が集中する居住域と方形周溝墓が築造された墓域とに明確に区分される。竪穴住居は、いずれも方形を呈しており、重複して検出された。また、方形周溝墓は、すべてのものが四隅に陸橋部を有するタイプであり、所謂「東日本的周溝墓」の初現として位置付けられよう。

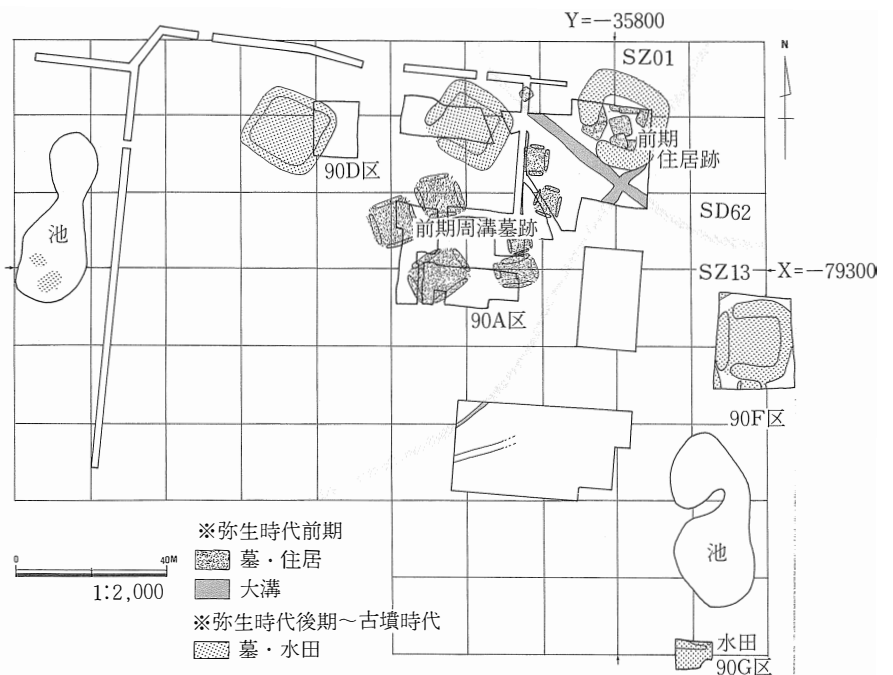
弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構としては、墳丘墓と水田がある。墳丘墓は6基確認しており、主体部が残存するSZ10及びSZ13は注目される。特に、SZ13は、廻間Ⅰ期の段階で前方後方型墳丘墓を意識して改変が加えられており、弥生時代から古墳時代への墓制の展開を考えるうえで興味深い資料と言えよう。90G区で検出した水田は、耕作土は既に削平されていたが、僅かに残る畦畔より小区画水田であると考えられる。遺物としては、A類に属するS字甕等が若干出土している。

以上、調査の結果を中心に概略を記してきたが、今後の遺物整理のなかでそれらの持つ歴史的意義付け等を考えていきたいと思う。

(服部信博)



SD62出土遺物(1:8)

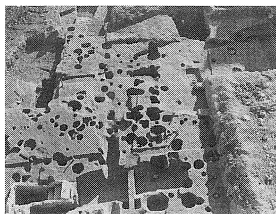


遺構配置図(1:2000)

発掘 ニ ュ ー ス

吉田城跡

豊橋市



西半部(北より)

豊橋市八丁通に所在し、豊橋警察署建替により調査を実施した。近世末作成の吉田藩士屋敷図によれば、調査区は家老屋敷内にあたり、それに関連する柱穴群、地割溝等を検出した。また戦国期吉田城（今橋城）に伴う大溝も確認された。



作業風景

東光寺遺跡

幸田町



弥生時代環濠

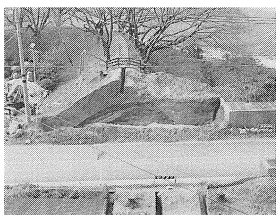
A区で弥生時代後期の竪穴住居1棟、集落の環濠となる溝4条を検出し、先年度の調査と合わせて居住域の東西範囲を確認できた。また、溝より寄道式土器が多量に出土した。B区では、弥生時代中期などの竪穴住居跡、近世の溝等を検出した。



弥生後期竪穴住居

黄金堤

吉良町



遠景(東より)

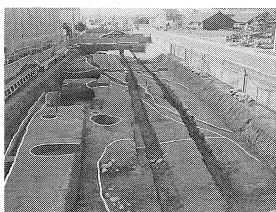
幡豆郡吉良町岡山に所在。貞享3(1686)年、吉良上野介義央による洪水防止の為に築堤と伝えられる。調査の結果、当初は1.8m高のもので4～5回の補強を経て、現在高5mを測ることが判明。遺物の出土が無く、時代を特定するに至らなかった。



堤断面(南より)

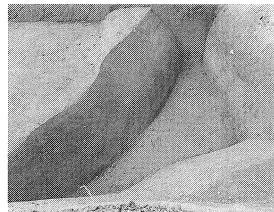
岩倉城遺跡

岩倉市



B区 上面遺構

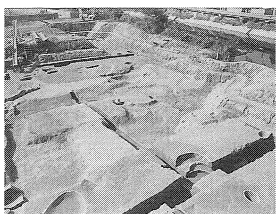
既にC区を終了し、現在B区を調査中。C区では、弥生時代中期の溝1条を確認。B区では、上面の調査において、中世の道跡及び企画性をもった岩倉城期の溝3条を検出した。また、下面では5世紀後半から6世紀初頭にかけての方墳を確認している。



C区 S D01(南より)

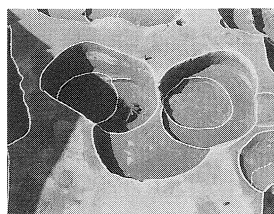
清洲城下町遺跡

清洲町



D区 天正地震噴砂

本年度は初めて五条川現堤防下の調査に着手した。その結果、旧五条川流路跡及びそれを埋めた整地層、さらにそれらを覆う天正地震の噴砂を確認した。噴砂除去後の整地層上からは溝1条の他は遺構はなかった。また多数の人の足跡を検出した。



B区 宿場町期戸群

資料紹介

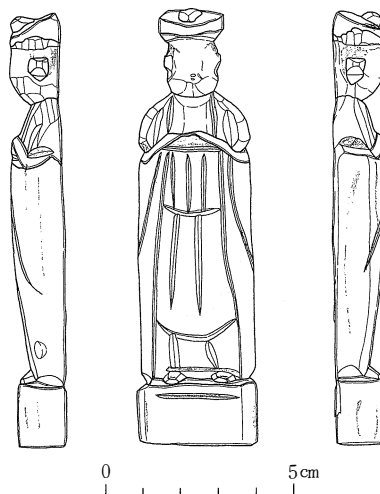
清洲城下町遺跡出土

木製立像

清洲城下町遺跡の89F区より木製立像が、寺域を区画すると思われる東西に走る幅3m20cm、深さ77cmを測る溝(SD02)の埋土中より、16世紀末から17世紀初めにかけての陶磁器類と共に出土し、当時の信仰を理解するうえで貴重な資料として注目されている。

台座のある木製立像は、全長11.5cm、幅3.1cm、最大厚さ1.4cmを測る。帽子?をかぶり、体軀の衣文は太く、頭体から両足下まで彫出され、帽子の一部、髪、衣文の一部には墨彩、帽子の前面一部、両手部、衣文の一部、台座の一部には鮮やかな朱彩が残る。なお顔に描かれた眉や両眼の彩色は現在残っておらず、口の彫込みは浅い。

この異国的な頭部形態をもつ木製立像は、仏



像、神像、肖像のいずれの部類にも該当せず、手を合わせているような様子から信仰の像であることが考えられ、地方独自の民間信仰の護神体ではないかと思われるのである。

(小澤一弘)

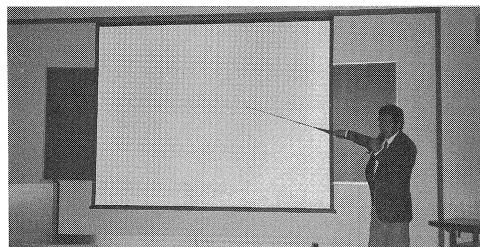
セ ン タ ー 日 誌

来訪者

- | | |
|-------------------|-----------|
| 8. 6 大阪府教育委員会 | 広瀬和雄氏 |
| 信州大学 | 大参義一氏 |
| 8. 7 京都文化博物館 | 定森秀夫氏 |
| 岩倉市教育委員会 | 浅野清春氏 |
| 8.13 文化庁美術工芸課 | 斎藤孝正氏 |
| 8.20 名古屋学院大学 | 檜崎彰一氏 |
| 8.24 県教育委員会 | 鈴木隆俊氏 |
| 県教育委員会文化財課 | 高橋家利氏 |
| 県立鳴海高校 | 佐藤公保氏他4名 |
| 県立尾西高校 | 宮崎敬子氏他1名 |
| 県立春日井南高校 | 中野良法氏 |
| 8.27 豊橋南高校開放講座 | 大林淳夫氏他49名 |
| 8.29 清洲町五条小学校 | 山仲廣司氏他18名 |
| 8.30 貝殻山貝塚資料館 | 野口哲也氏 |
| 9.10 静岡大学 | 加藤芳朗氏 |
| 東京大学 | 宇佐美龍夫氏 |
| 9.13 石川県埋蔵文化財センター | 大西外美男氏 |
| 10. 1 愛知県陶磁資料館 | 柴垣勇夫氏 |
| 10.15 名城大学 | 吉野道彦氏 |

10.16~18 インドネシア大学

Wanny



- | | |
|----------------|----------|
| 10.30 県立稲沢東高校 | 杉山則夫氏他1名 |
| 11.14 徳島県教育委員会 | 木村義則氏他2名 |
| 11.27 瀬戸市教育委員会 | 大蔵順子氏他2名 |
| 11.28 名古屋市博物館 | 犬塚康博氏 |
| 11.30 岐阜県教育委員会 | 菱田慶治氏他2名 |

埋蔵文化財愛知No. 23

発行 平成3年1月
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
字野方802番24
TEL 0567-67-4161~4163
印刷 株式会社 クイックス